

「木姿剪定経営」のコツ

木づくりの剪定。

立派な木姿になっていく木づくり剪定は、8つの順番の要素がある。

- ① まずは根張り。
しっかりと地中に値を張り、自力で根の先から栄養、経営資源を吸い取る。
根回りの範囲が事業領域（ドメイン）である。
- ② 次は下刈りである。
地面に近いところの枝は切り取り、成長を妨げる雑草などをとる。
企業では現場の風通しと見通しをよくすることである。
- ③ そして葉刈りである。
枝は相互に邪魔しないように、光と風と雨水がよく通るように、しかも虫も適宜飛んでくるように、枝落としと羽刈りをして樹形を整える。
事業戦線と商品ラインの陣形整理、そして進出、撤退の選別と集中である。まさに事業執行です。
- ④ ある程度生育したら、先端部分の成長点を止める必要がある。
自然の野山では風や鳥によって、先端は止められている。庭木では植木屋が止めるのである。
企業も分相応の成長を知って、業界市場の中で収まりが大切である。
いつまでも成長を求めてはいけぬ。覇権や拡大の行き過ぎで、破たんする例が多い。
- ⑤ 成長に従い、樹間の距離をとることが大切である。
密集すれば光不足での病気、害虫の被害、森では摩擦による火災の心配がある。
何よりも伸び伸びと成長できない。そのために間伐、移植が必要となる。
いわばグループ内でのリストラや業界内の統合再編、そして拠点の移動整理である。
- ⑥ 他の木の枝や芽を接ぎ合わせる接木は、新しい業種業態への転換や第二創業、そしてM&A、組織風土の改革とも言える。
- ⑦ 肥料はやりすぎても不足してもいけない。
過剰投資、過当競争、不相応な賃金などは厳禁である。
- ⑧ 最後は枯葉、落葉の肥料化、虫や鳥、動物との相互扶助、水の循環など、周囲、自然との共生が眼に見えない生存条件である。
事業活動の川上、川中、川下のバリューチェーン、そしてステークホルダーとの関係において社会との循環共生・環境保護を大切にすることである。

こうした考え方を実践している木姿の企業が「老舗」として長く永続している。

老舗経営の鉄則

1. 老舗は眼に見えないところの新陳代謝でしっかりした木姿を整える。
経営資源はもとより、商品サービスの成果物も日々古いものを取り去り、新しいものに入れ替えていくことが大切である。
2. 老舗は、己の分を知って成長点で止まる。
山並みを見ても、突出した木はない。ヒョロヒョロと一本立ちした樹木は危なっかしい。群れより出すぎると、落雷の危険に晒され、風に飛ばされる。
3. ありたい姿を想定し、「下刈り」「葉刈り」「枝落とし」の剪定でよい木姿を目指す。
樹木は毎日同じように見えても、日々新たな工夫改善をして、すばらしい木姿となる。だからといって樹木は、自らの木姿を自慢しない。傲慢にもならない。世間が評価し感心するだけである。企業も自慢、傲慢は最もいけない。

<コメント>

最近、「盆栽」がブームだそうです。
欧米人（特にドイツ）から人気が目され、日本人も新たな価値を再発見しているようです。
小さな鉢植えの中に「小宇宙」を表現している、とか？
私にはよくわかりませんが、立ち姿や枝ぶり、根張りが重要なことはわかります。
今回の木づくりの剪定の鍵は・・・成長点を止める必要がある。経営も全く同じですね！
ここには、なるほどなあ〜と実感した次第です。